



インターネットの野望

会計理事 秋葉重幸

最近のインターネットの躍進・台頭について考えていてふとモンゴル帝国のことを思った。13世紀初頭に中央アジア高原から起こり、東ヨーロッパから中国・朝鮮半島まで瞬く間に広がった、あのモンゴル大帝国である。我々の社会生活の多くの場面に多かれ少なかれインターネットが浸透し、大きな影響を及ぼしていることから、そういったイメージがほうふつと沸いてきた。

情報革命、ICT革命の時代といわれる。革命では既成・既存のものがとことん壊される。通信では既に起こっている。携帯電話の音声を除けばほぼIP化されたといってよい。家庭とオフィスにブロードバンドインフラが浸透し、固定系、特にFTTHではエンドツーエンドで既にIP（音声もVoIP）化されている。一世代前の情報革命といわれる印刷技術の出現のときは、高級・高価であった本が瞬く間に安くなったといわれる。同じようにかつては高級・高価であった長距離電話や国際電話は瞬く間に安くなった。放送分野にもIP化の波が押し寄せている。通信と放送の融合といわれるが、実際には放送のIP化ともいえるかもしれない。放送がIP化されれば、既にIP化された通信とは境界がおのずとぼけてくる。

最近の家庭ではテレビを見ている時間よりもインターネットをしている時間の方が長くなったともいわれている。学会誌や論文誌もWebで読むのが普通になってきている。本学会もインターネットに飲み込まれる（既にそうなっている？）のであろうか。グーグル図書館やIEEEにすべて巻き取られるのであろうか。米国の主要大学の図書館などにある世界の多くの書籍が既にインターネット・Webの世界に取り込まれつつある。また、IEEE主催・共催の会議への集中は確実に進行している。本学会も財務的に余裕のある今のうちに大胆な施策に打って出る時期だと思う。では、どんな策があるのか。範囲を限定するにしても会費を無料にしてやっていけるのか。IEEEは既に学生会員には会費免除の動きを見せている。米国では大学周辺の街が定年退職後に住みたいところのNo.1に挙げられていると聞く。年齢を重ねるに連れてアカデミーへのあこがれが増すのかもしれない。若いときの差し迫った状況とは違ったあこがれかもしれない。だとすると、そういったニーズを取り込んで、新たなマーケットとして、シニアソサイエティなどを作ってはどうだろうか。場所の提供など大学との協調も重要になると思う。いろいろなアイデアをサポートする財務的余裕は今なら十分にある。

話は戻るが、インターネットはどこを目指しているのだろうか。IPv4からv6への移行が本格化しようとしているし、現在のインターネットの持つ欠点を克服しようとするポストIP、あるいは新世代ネットワークの検討が日米欧で盛んに行われている。インターネット自体が野望を持つことはないだろうが、これだけインターネットが世界のあらゆる分野に浸透すると、それを運営・管理する人間・組織、あるいはそれを利用する産業界、国家は様々な思惑を持ちつつ、時には野心的に動く。それをインターネットの野望と呼ぶのはいささか乱暴で表現がずれているかもしれないが、実際そんな雰囲気を感じるのは私一人だけではないのではなかろうか。

最近のモンゴル出身力士の活躍をよく見ていて、モンゴル大帝国とインターネットが頭に浮かび、このような思いを巡らすに至った次第である。